

お互いの利点を活かして役割分担！

特定非営利活動法人 大原里づくり協会
理事長 和田野 光彦 さん
事務局長 阪後 武史 さん



じっくり取り組むことが大切。
みんなで取り組みだしたら、すごいことですよ！（和田野さん）



もっといろんな人が関わり、お互いの団体が丸となって、
「まずは一度一緒にやろう」という仲間を増やしたいです。（阪後さん）

京阪三条からバスに揺られる事約40分。のどかな風景の先にある「里の駅大原」の程近くに、「大原里づくり協会」は事務所を構えています。

特定非営利活動法人「大原里づくり協会」は、「村おこし」という大きなテーマを掲げ、大原の歴史的・伝統的な環境の保全と整備の推進、観光と農業の振興、住民が安全で快適に暮らせる里づくりを目的に活動しています。

■お互いの利点を活かした分担・協力体制■



自治会・町内会との関係についてお聞きすると、お互いの得意な点を探しあった結果、おのずと役割分担ができてきたとのこと。

元々大原の住民によって組織された「里づくり協会」は、朝市から始まりました。その後メンバーで「村おこし」をテーマに今後どう展開していこうかと議論を重ねた結果、大原の景観・環境問題に行き着きました。「私たちにできることは何かと考えたら、景観・環境問題だったんです。NPOでないといけない面があったんですよ。」そう語る和田野さん。大原に住む人々の意識改革に着手していきました。

環境問題も景観問題も、成果が出るまでにはとても時間がかかります。短い期間でメンバーが入れ替わる自治会では長期的に取り組まなければならない問題には取り組みづらいという現実がありました。そこで、長期的に取り組むべき環境問題・景観問題に関しては「里づくり協会」が対応し、住民の生活に直結したテーマで単年度で取り組むべき事項については自治会が対応することで、お互いの利点を活かした形での分担・協力体制が自然に構築されていきました。

■具体的な連携事例と成果について■

自治会・町内会との連携事業として、2004年5月に作成した「大原里づくりマスタープラン」があります。これは荒廃し始めた農村や歴史的環境の衰退に歯止めをかけるため、これからの大原をより魅力的な里にしていくための基本方針として制定しました。基本的には大原自治連合会と「里づくり協会」



が中心になって、各町内会長、大原で活動している各種団体の代表が集まってチームを立ち上げて作成され、2012年にはプランの見直しを図りました。「こういうのは村の人ができるだけ参加しないと意味がないんです。」作成した2004年の段階では、里づくり協会が中心となってプランを作成し、下水道や都市農村交流拠点施設（里の駅大原）の設置など、主にハード面を計画・整備していきましたが、2012年の見直しではできるだけ多くの団体等に参加できるように、自治連合会を中心として見直しを進めていきました。

「里づくり協会」も会員約100名で構成されていますが、大原の全人口は約2500人、世帯数で言えば約500戸あります。数の面から考えても、自治連合会が中心になって進めた方が、より多方面からの協力が期待できると判断し、自治連合会を中心に据え、多様な団体や人々と連携して実施に向けて取り組んでいきました。

また、住民から廃油を集めて石鹸を作る取組は、実施した当初は誰も行っていなかったが、現在では住民の間で定着し、今も取組が続いています。大原では、地域での一斉清掃活動を20年間続けているなど、元々環境問題に対して地域住民の意識は高く、自治会自体が昔から環境問題に取り組むことに意欲的だったそうです。そこに効果的に様々な形で住民の意識が変わるきっかけを提供し、着実に住民の意識が変わってきている事を成果として語られました。「もっとみんなが毎日の生活の中で自分にできることを一つでもいいので継続的に実行できる体制づくりが必要」と考え、そのきっかけづくりを里づくり協会では提供しています。

■これからの展望について■

自治会には、地域で資源を持つ人や団体同士を連携させる力を期待しています。大原と言えば三千院や寂光院のように有名な観光地がありますが、一方で大原にはまだ形にできていない観光資源が多く眠っています。例えば、今後は農業体験や民宿生活体験など、これまで誰も観光としてとらえていなかった体験型の観光の在り方も検討されています。実現には一つのNPOでは限界があるため、寺を含めた観光関係者や農業を実施している住民組織等との連携が不可欠であり、また、町内の代表である自治会がその役割を担う事も重要です。



また、大原に住む住民の方々に異なる文化を持った人たちをもっと受け入れてもらいたいと語ります。現在、大原以外にお住まいの市民から、大原で有機農業をしながら子育てをしたいという声が少しずつ増えています。空家もあり、休耕田もありますが、空家や農地を貸してもいいという人はなかなか現れにくいそうです。「地域住民の意識向上に向けて自治会と一緒に取り組みたい。じっくり取り組むことが大切。みんなで取り組み出したらすごいことですよ。」そうこれからの展望を語られました。